### フィールドワーク便り

## スリランカの老人

### ――来世に向かった慈善・積徳行為―

中村沙絵\*

2年前,私はスマトラ沖地震による津波をきっかけに,スリランカを訪れた.そこでNGO の活動に参加しながら,現地の若者とともに,多くのお年寄りにも出会った.それ以来,私はすっかりスリランカが好きになり,スリランカという社会をもっと知りたいと思うようになった.

ところで、これまでのスリランカについての多くの研究は、成人男女の視点からなされてきた。では、お年寄りの視点を通してみたとき、いったいどんな社会が描けるのだろう。そう考えた私は、スリランカでお年寄りの研究をすることにした。ここでは、フィールドワークを通して出会ってきた多くのお年寄りのなかでも、とくに印象深い2組の老夫婦を紹介したい。

#### 初めてのスリランカと、ピーリス夫妻

スリランカの宗教というと仏教のイメージ が強いが、私にとって最初のイメージは、カトリック教徒であるピーリス夫妻との出会い により形作られた. 2人が住んでいるのは、 モラトゥワという海岸の町である. スリラン カ西南海岸沿いの国道を、大都市コロンボ からバスで 1 時間ほど南下したところにある (写真 1).

町の中心には、聖セバスチャン教会がある. ピーリス夫妻は、とくに体の調子が悪くなければ、家から徒歩10分ほどのその教会へ毎朝6時に出掛けてゆく. ポルトガルによる植民地化以来、スリランカの海岸部にはキリスト教が広まった. このモラトゥワもキリスト教色の強いことで有名である.

私が初めてこの町を訪れたのは大学院に入る前で、そのころはまだ、あの恐ろしい津波の傷跡が随所に生々しく残っていた。NGOの知り合いから、私を下宿させてもいいと



写真 1 スリランカ西南海岸の浜辺

<sup>\*</sup> 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

言っている老夫婦がいる, と聞いてやってきた. そこで出迎えてくれたのが, このピーリス夫妻であった. 私は, おばあさんの方をアンマ (お母さん), おじいさんの方をターティ (お父さん)と呼んだ.

一緒に暮らしているうち、私は2人がいろいろな病気を抱えていることを知った.アンマもターティも糖尿病で、さらにアンマは心臓病も患っていた.慢性的な膝の痛みもあって、長距離を歩くと体全身がどっと疲れてしまう.アンマは、10数種類の西洋医薬品を近くの薬屋から購入し、それらを朝、昼、晚と飲む.うっかり忘れてしまうと胸部が痛み、血糖値があがるので、ターティはその都度叱る.こんな状況にあっても、親のように私を見守ってくれる2人に、私は甘えきっていた.

そして、今でも忘れられないことが起こっ た. 私は津波の被害を受けた浜辺の集落で援 助の実態調査をしていたのだが、アンマと ターティから「浜辺はとくに不用心だから, 日暮れ前には必ずもどってくるように」とい つも念を押されていた. しかし, この日ばか りは、どうしてもインタビューが長引いてし まった.終わった頃はもう辺りは薄暗く、不 安が募った. 何度か家に電話をかけたが繋が らない. 不穏な心持ちで家に帰ると, 私を心 配するあまり、アンマは心臓発作を起こして 寝込んでしまっていた. 私は, ベッドで苦し そうにしているアンマと初めて怒ったター ティを前に、ドアの傍で立ちすくんでしまっ た. 心もとなさと申し訳なさに困惑し、涙が 溢れたのを覚えている.

当時は英語しかできなかったので、アンマは私のために"sacrifice"を払っているのだと何度も口にした。「犠牲」という語のここでの意味合いがよく解っていなかった私は、心で深く詫びながらも、少しむっとしてしまうこともあった。なぜそもそも身体が大変な状態で、私をひきとろうと思ったのかと、強い口調で聞き返したこともあった。

後にわかったのであるが、アンマにとって、私をひきとることは一大決心だったのである。彼女の背中を押したのはターティのひとことであった。「他に寄る辺もなくお金もない学生を2ヵ月間もホテルに泊まらせるなんて"sin"(罪)なことじゃないか、私があなたをサポートするからひきとろう。」寄る辺のない一文無しの学生を放っておくのは、彼らにとって罪なのである。アンマはカトリック教徒であり、来世には天国で神をみることが、最上の願いだ。そのためにも、他人の痛みも自分のものとして引き受け、時間や労力を無償で与えること、すなわち犠牲を払うことに大きな人生の価値をおいていたのである。それはターティも同じであった。

だからこそ、私は2人のもとに来ることを 許され、アンマが倒れたあとも居候し続け、 そして、アンマは、私のために「犠牲」を払 い続けた.彼らは私を娘として扱った.結 局、彼らは最後まで私から一銭のお金も受け 取らなかった.

アンマは孫の面倒をみるために、教員の職を49歳で辞めたのだが、彼女の意に反して子どもの家族が一緒に住むことはなかった。アンマによると、彼女はこの件で落胆し、糖

尿病を患ったという. それでもアンマの活躍 ぶりには、目を見張るものがある。 なんと いっても74歳にして、近所の学校で英語の 教師を引き受けている、校長である牧師さん に, 英語教師に対する教育を頼まれたのが きっかけだったというが、交通費だけをもら い、月曜日から金曜日まで休み無く働く、働 いたあとは, 近所に住む次女の家に寄る. ご 飯を食べ, 残りの仕事をし, 時には孫の勉 強をみて、少し休息する、そして夕方6時ご ろ、次女の夫が車で家まで送る. ターティは というと、アンマの薬を購入するために続 けている家具屋の仕事を終えて、6時半に帰 る. 近所のおばさんから購入する家庭料理で 早めの食事をすませ、アンマは疲れてベッド で休む. 1日の終わりだ. それをみて, 蚊帳 をそっとかけてあげるのが、毎晩のターティ の役目であった(写真2).

私が老人ホームに行き始めたころ、アンマはこんなことを話してくれた.「あそこの老人ホームに、起きられない寝たきりの高齢者がいたら、そのひとたちに衣服をあげたいと

思っているの. できれば 1 人 1 人身体を洗ってあげて、着せてあげたい. サエ、どう思う?

#### アマラシリ夫妻

初めてのスリランカ滞在から1年半ほどたち,私は再びスリランカに赴いた。そして,毎日のようにコロンボ郊外の老人ホームに行き,そこにいるおばあさんたちと,行動をともにしていた(写真3).

彼女たちに混じって、ホームに近接する 仏教寺院に通うのは、水曜日と金曜日の午 後4時であった。向かった先で行なうのは、 菩提樹供養(ボーディ・プージャ)である。 菩提樹供養というのは、ブッダが悟りを開 いたとされる菩提樹に花やココヤシ油や水 などの供物を捧げて、お祈りをする儀礼だ。 10人程度の高齢の女性が、白いサリー(オ サリ)や洋服を身につけ、髪をきちんと結 い、各自香しい花やロウソクをもってやって くる。この供養には、老人ホームのおばあさ んたちだけではなく、近隣の敬虔な仏教徒も



写真 2 次女の家で残りの仕事をするアンマ



**写真 3 ある老人ホームでの一場面** 近所のこどもがよく遊びにくる.

参加している. 私はこの菩提樹の下で, 初めてアマラシリの奥さんに出会った(写真4).

この儀礼で、はじめにお経を唱えるのが、 このアマラシリの奥さんの役目だ.彼女が供 養を先導していく.お経が書かれた本は各自 持参で、供養の前には文字を読むためにみな 眼鏡をかける.でもアマラシリの奥さんはか けない.すべて暗記しているからだ.

アマラシリの奥さんが菩提樹供養を始めたのは、10年ほど前であった。そのころ親しい仲にあったマニヨ(比丘尼)がこの集会を始めたが、彼女が亡くなる前に「この供養だけは死ぬまで続けるように」と言葉を残したそうで、アマラシリの奥さんはこの約束を守り続けている。

これ以降,私はしばしばアマラシリさん宅を訪れた.アマラシリの奥さんは,夫をアマラシリ・ビク(比丘)と呼んだ.若いころ木彫りのアーティストであった彼は,子どもが結婚したのちタイで出家し、僧になって帰国した.スリランカでは数少ない托鉢僧だったそうだ.数年前,不意に下半身麻痺となってしまい,奥さんと娘が家につれて帰ってきた



写真 4 ホームに隣接する寺院での菩提樹供養

という. 今では毎日,白い法衣に身を包み, 杖をついて,すり足で,ゆっくり歩く.

スリランカでは一般に、黄色い袈裟が僧侶の衣服であるが、敬虔な在家の仏教徒のなかには、白い法衣を身につけ、僧侶と同じように戒律を守り、在家信徒に説教をする人たちがいる。シンハラ語では彼らを8戒(ata sil)もしくは10戒(dasa sil)をまもる優婆夷(upasika)・優婆塞(upasaka)と呼び、尊敬する。アマラシリ・ビクも在家なので優婆塞である。

朝は玄関の外に 5 メートルほどのびる,手 すりつきの小道でリハビリをする.「朝の仕 事が終わった」といって家に入ると,ソファ に座ってじっとし,呼吸を整える.「彼は, もう耳も遠くなってしまったし,言葉もすぐ に出てこないけど,頭のなかにはすべてダン マ・ポタ (経典) が入っているのよ」と,奥 さんは目をくりくりさせてよく言った.

2人は、もっていた土地を1人の娘と2人の息子にそれぞれわけようと考えていた. しかし、今住んでいる土地と家を相続させようと思っていた長男は、オーストラリアで永住権を取得したため、帰ってこない. しかし、2人とも平気な顔をしている. 子どもたちが幸せにやっているならば、それが一番. そう言って、杖の端と端を引っ張り合いながらじゃれあう.

この夫婦にとって、積徳行為は生活の中心であるようにみえた. 上座仏教においては、よい行ない――たとえば、2人の話によると寺院に仏像を寄進したり、菩提樹の枝を支える棒を寄進したりすること――を重ねること

が、来世でのよりよき生に繋がっている。またアマラシリ夫妻は、すべてのものは自分のものではない、という話を幾度もした。「お布施というのは食べ物だとかお金だとかをあげることだけではなくて、そもそも身体もふくむすべてを自分のものと考えず、放棄することなのよ。」そう仏教の冊子を引用し、繰り返し教えてくれた。

そんなアマラシリ夫妻にとって、なかなか 手放せないのが、山のように積まれた本で あった。家のなかには1室、書庫のような部 屋があり、今では誰も出入りしなくなってい る。しかし、なかなか捨てられない。

いつか奥さんが、私にプレゼントする本を探し始めたことがあった。奥さんが本棚から1冊の本を取り出す。それを見たビクは「いや、この本は私が誰某から何処何時にもらった本で…」と、なかなか首を縦に振らない。「そんなに執着しないでもいいのに」と奥さんはつぶやく。今度はビクが、1冊もち出す。すると奥さんは「この本はどうしても特別な本で云々…」と話し始める。しまいに

は、小競り合いにまでなってしまった.

「これで仏教のことをちゃんと勉強しなさい」,そう言って2人から渡されたのは,ブッダの初めての説法が収められた『Dhammacakka-pavattana Sutta(初転法輪経)』だった.イギリスの僧院からスリランカを訪れた著名な僧から,特別に2人が受け取った本だそうで,それこそ2人の身体の一部,大切な書籍である.ペンをもてない2人に代わり,私は「2007.3.29アマラシリ夫妻より」と覚書をした.

小さなことに動揺しがちで、優柔不断な私は、揺るぐことのない信念をもって接しようとする彼らの頑強さに時に圧倒されながらも、日本ではこんなつきあいがどれほどできるだろうかと思う。家族の事情や健康の問題があっても、それぞれ慈善や功徳を積み、来世に向かって積極的に生きるひとたちの姿に、私はいつも惹かれ心打たれながら、フィールドでの毎日を過ごしている。

## 選挙フィーバー

## ―社会分節の想像と創造―

白 石 壮一郎\*

疾走する乗り合い自動車にゆられ首都カンパラから 4-5 時間移動したのち、山麓の小さな商都ムバレに着き、乗り換えのために別の

停留所に歩く. 空き地にはおんぼろの日本製 ワゴン車が無造作に20台ほど並んでおり, 定位置の樹下に停泊する車輌付近に重いザッ

ク2つをおろして一息つく. ここから出る 乗り合いが、めざすエルゴン山に入るのだ。 14人乗りのせまい車内には人がまだまばら だ. このようすからすれば発車まであと30 分はあるだろう. かつて「アフリカの真珠」 と称された緑豊かな国ウガンダ、その東端の フィールドの山村に向かうまでのこのルート も、もうすっかり馴染みになった. 山麓の町 はずれにあるこの停留所ではじめて、首都で はめったに耳にすることのない山地農耕民サ ビニ (Sabiny) のことばに接することになる. さっそくその辺りのサビニ語でしゃべってい る男に声をかける. これから向かうフィール ドの最新情報を仕入れるわけだ。2001年12 月,4回目の現地調査に入るとき,ここで私 が話しかけたのは、首都の大学から帰省中 のサビニ出身のエリート大学生だった.「地 元はどうだ」と私が話しかけると、意外に も返ってきた答えは次のようなものだった. 「ああ、ダメだ、みんな政治に狂ってしまっ ている, まっぷたつだ.」私は彼の言う「政 治狂い」「まっぷたつ」の意味を掴みかねた. 「選挙だよ」と彼は言った。

#### オジの立候補

私の到着に先立つこの年3月の現ムセベニ 大統領の再選と、6月の国会議員選挙に続き、 翌2002年に予定されていた地方評議員の選 挙のために、ウガンダの各地は沸いていた. 現政権下でのウガンダの地方自治は、「地 方評議会(Local Council)制」をとってお り、中央政府のもとに各県(2002年当時で全国56県)があり、下から村(LC1)、教区 (LC2)、サブ・カウンティ(LC3)、カウンティ(LC4)、そして県(LC5)と階層的に地方自治機構が配置されている。私はそれまで選挙の時期に滞在したことはなかったし、選挙がそれほど人びとにとって重要なものだとも思っていなかった。サビニの居住区であるエルゴン山のカプチョルワ県(以下 K 県)のフィールドの村々ではなにが起こっているのだろうか。そんな思いで村に到着した。

すでに畑のトウモロコシは数ヵ月前, 乾季 の真っ盛りに収穫されているから、村は見 晴らしがよい、いつもどおり、人びとの生 活には変わったようすもない. 大学生の言 葉を思い出させたのは、翌月にあった催し だった。年明けの2002年1月2日、村で私 が「父」と呼ぶ居候先のご主人ナココ氏の実 弟ブッシェンディッチ氏が地元サブ・カウン ティの評議会議員選挙に立候補し, 対立候補 で現職のチェプシゲイ氏とともに立会演説会 をひらいたのである. 私の「オジ」にあたる このブッシェンディッチは、如才ないところ があり、末の息子であるため兄弟のなかでも 比較的大きな畑を亡父から相続し、化学肥料 を使って栽培しているトウモロコシは毎年か なりの収量になる. 加えて, 自宅の一部を貯 蔵庫にあてトウモロコシの地元仲買もやる. 要するにこの地域では例外的な成功者のうち のひとりに数えられているのだ. 彼は高学歴 である。1980年代にこの地域は度重なる政

<sup>\*</sup> 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

権交代とそれにともなう近隣牧畜民からの牛 掠奪の激化によって治安が悪化し、人びとの 生活は荒廃していた.この時期に教育を受け たのは、別地域に移って通学した数少ない人 びとに限られている.1968年生まれの彼は、 小学校高学年から高校時代まで、親族を頼っ て西ケニアに出国して教育を受け、97年に 帰国すると地元で結婚して落ち着いた.この オジの突然の立候補を知らされ私は驚いた が、「彼ならばあるいは…」とも思った.

午後3時50分,立会演説会が始まった。 老若男女およそ 170 人もの聴衆が集まってい る、2人の候補者がくじ引きで演説の順番を 決め, ブッシュ候補(なんとオジは略称で 「ブッシュ」と呼ばれる)が先手となり、ケ ニアで教育を受けたプロフィールで自分の高 学歴を強調して, 数項目の政策目標(公約) を掲げ、およそ 15 分間ほどで演説を終了し た. 2 人目は現職チェプシゲイで, ブッシュ のように肩に力の入った熱弁調ではなく,周 囲にくまなく目を配り、 時々ジョークを交え て聴衆を笑わすような余裕もある。概して受 けがいい. さすがに現職の貫禄である. 2人 の演説が終わったのち、質疑の時間に入る. ブッシュ候補は「ずっとケニアにいた人間 に、地元のことがわかるのだろうか」という 厳しい質問を浴びせられるがなんとかそれに 答え、「いったいあなたの任期中になにが変 わったのか」と問われた現職は笑顔を崩さず に応じた. ほどなくしてブッシュ候補が私に 「何か言うことはないか」と水を向けてきた. スピーチなどなにも用意していなかった私は, しかたなくこのような公の場でいつもやるサ



写真 1 演説会の帰路. ブッシュ候補を先頭にした行列

ビニ語での自己紹介と挨拶でお茶を濁した.

立会演説会が終わったあとの熱気は、いま でも忘れがたい、現職はそのとき所用で町に 向かったが, ブッシュ候補は村にある家に もどったので、帰り道は一緒だ. ブッシュ の支援者たちは、行列を作りながら、「火 を燃やせ、いつものように ('Kaarai maata yu kwa')」「おおチェプシゲイ、燃えて消え ちゃった ('Chepsigei, rai baate,' 対立候補を 盗っ人に見立ててからかう替え歌)」など, いくつかの歌を凱旋歌のごとく大合唱しつつ 練り歩いた. 普段は冗談ばかり言っている青 年がこの行列のなかで、 感極まって涙声で絶 唱しているのを目にして, 私は不思議に思っ た. なぜこれほどまでに人びとは選挙に熱 狂するのだろうか、1月5日の教区一斉投票 ののち、9つある村ごとに開票結果が伝令を 通して報じられた. われわれの住む村では、 181 票対 183 票の僅差でブッシュは惜しくも現 職に破れ、支持者たちはおおいに不満がった. 結局接戦のすえ, 最後の村の開票でブッシュ は当選し,支持者たちは狂喜した.



写真 2 村での開票風景. 村人たちが固唾をのん で結果を待つ

#### 選挙戦の背後にあった政治劇

つづく県評議会議員の選挙までの期間,私は少し注意して人びとの選挙にまつわる言動を気にしてみることにした。道行く私に対しての,「Chone-anu?(どこから来た?)」「Kewo-anu?(どこに行く?)」という人びとのいつもの挨拶に続けて,「Kewo kwayishet?(選挙に行ったか?)」と笑いながら言う人が少なくなかった。男たちが昼過ぎにたまり場にしている村の茶店に足を運べば,選挙の話がちらほら聞こえてきた。かれらの「政談」に耳を傾けると,地方評議会の議員選挙戦の背後には,さらに上位のサビニ人政治家どうしの対立があることがわかってきた。

K県から選出される国会議員は4名.この うちのひとり、ドクター・チェプロットは もっとも名が知られた、いわばサビニの政治 ボス的な存在だ.「ドクター」の呼び名のと おり、彼は医者であるらしい.彼を政敵と目 しているのが、若手のチェモンゲス氏で、い ままで2度国会議員選挙に出馬したが当選を 果たしていない. 県下の LC1~LC5 各レベ

ルの地方評議会議員候補はみな、このチェプ ロット/チェモンゲス両氏のどちらかの支持 者で2派に分かれているという. そして候補 者と同じく投票する側も, この両派にきれい に色分けできるというのだ. 私はこころみに 村の2人の男性に別々に、この村で世帯を構 えているひとりひとりが「どちら派」なのか を聞いてみた、2人が私に教えてくれた色分 けは, ほぼ一致していた. しかも, 「あそこ の家は、夫がチェモンゲス派だが妻はチェプ ロット派だ. 妻はそれを夫には内緒にしてい るが…」「かれは以前チェプロット派だった が、いまはチェモンゲス派だ」といったこと まで教えてくれた。ここまではっきり知られ ていることもさることながら、たとえば親族 あげて○○派だ、というように既存の社会分 節によってその色分けが決まってしまうので はないということは私にとって発見だった. たとえば私の父ナココはチェプロット派で, 実弟ブッシュはチェモンゲス派だ.

では、停留所で大学生が言ったように、 K 県全体が「まっぷたつ」なのだとして、人 びとはどのようにしてどちらの派につくのか を決めるのだろうか、チェモンゲス氏はかつ てのサビニの英雄の実息である。彼の父は、 ウガンダの英国保護領期に、全国区ではじめ て名を知られたサビニの政治家で、「キンゴ (Kingo、英語 king が訛った語、ただしサビ ニには伝統的な王制などない)」の愛称で親 しまれた。この「キンゴ」は、エルゴン山域 の K 県を創設するのに尽力した人物である。 保護領期にサビニの居住区は、山麓に住む農 耕民ギス(Gisu)と同一の区分(ギス県)に 編入されていた。サビニはナイロート系、ギ スはバンツー系と言語系統が異なり、そのほ かに生活文化でも諸々の違いがある. 当時の 地方行政官のほとんどのポストはギスで占め られていたため、サビニは「虐げられた」立 場であったという. 両者の間ではしばしば武 力闘争を含むコンフリクトもあった。 そのよ うななかで、自民族の居住区を県として独立 させるという悲願を,1962年にウガンダが 英国保護領から独立する直前に達成した立役 者が、このチェモンゲスの父だったのであ る. したがって、この時期のことを知る年長 者の多くはチェモンゲス派であろう、という 読みがある。かたや、チェプロット氏は、母 親がギスである. K 県がサビニランドとして 「独立」しても、県内には一定のギス人口が あり(県人口の約1割),とくに、県庁の町 や県内の小マーケット付近に集中している. これらのギス人口はすべてチェプロット派で あろう,という読みもある.

このように、誰を支持するかは自分がサビニかギスかで決まってしまうのならば、K県下で圧倒的人口多数であるサビニに支持される若手のチェモンゲスに有利なように聞こえる。だがチェプロットを支持するのはギス勢力だけではない。チェプロットが現政権下においてサビニ政治家の第一人者となった背景はこうだ。現ムセベニ大統領がクーデターで1986年に政権を奪取するまえにまだ反政府抵抗軍にいたころ、内戦で負傷し、病院に担ぎ込まれた際に手厚く手当てをしてくれたのがほかならぬドクター・チェプロットだった。これを恩義に感じたムセベニは、自分が

大統領に就任してからチェプロットに国会議 員の議席を用意したという.これは現大統領 とチェプロットとの良好な関係を表す美談と してつとに有名だ.現大統領と親交をもつと いう評判は強い味方である.

だが、流動的な政局をあらわすエピソード もある。サビニの退役軍人ジミというフィク サーがいて、この男はある時点までチェプ ロットと懇意だったのだが、その後に鞍替え してチェモンゲスの支援をするようになっ た. チェプロットがアメリカ滞在中に購入 し、ウガンダのジミのもとに輸送して預かっ てもらっていた品々をジミが着服し、両者が 決裂したからだ. 軍部に人脈をもつジミは, 同じく軍出身の若手チェモンゲスと組んだ. 加えて、チェプロットと大統領との仲も悪く なったとの噂もある。1990年代までウガン ダ有数の悪路だったエルゴン山域の道路の舗 装事業がチェプロット氏の大統領へのはたら きかけによって始まったのだが、大統領の実 弟サリム・サレがこの事業にかかわり, いつ

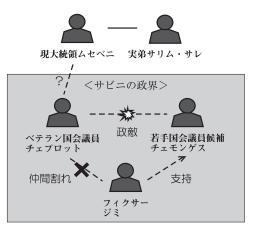


図1 政治劇の登場人物とその関係

のまにか当初チェプロットが大統領と約束した半分の距離に舗装計画が書き換えられていたというのである。だから 2001 年の大統領選にさいしてムセベニが K 県に地方遊説に来たときには、チェプロットは応援演説をしなかったのだ、とささやかれる。そして、道路舗装事業の計画「改変」を後ろから操作しているのが、やはり軍当局とかかわりの深い大統領実弟と昵懇のジミなのだ、と。

### 社会分節の想像と創造

男たちが村の茶屋で興じている上記のよう な「政談」は、実在の政治家たちを登場さ せ、虚実を織り交ぜたストーリーとなってい る. どこまでが事実で、どこまでが作り話な のかはわからない. おそらくは断片的な実話 が、サビニの間で焦点化されやすいモチーフ ――利益や資源をめぐる競合、それをめぐる 葛藤,嫉妬など――に即して翻案され、この ような定型のストーリーができあがっていっ たのだろう. 私にはこれが、たんに選挙戦に おける票読みや情報操作、あるいは「だから 自分は○○候補を支持するのだ」といった正 統性を争うためだけの言説であるとは思え なかった. ましてこの選挙熱を一足飛びに, 「農村の人びとの熱心な国家政治への参与」 などと考えることもできない. ただ, このよ うに語られる政治劇が、村での「まっぷた つ」の状況を創る想像力をあたえていること はたしかである。そして、選挙そのものだけ にでなく、生活のところどころにこの「まっ ぷたつ」の分節がもちこまれる.

たとえば、このような男たちの「政談」の

たまり場となったのは村の茶屋だが、選挙期 間中にチェプロット/チェモンゲス支持者た ちは教区内のそれぞれ別の店を縄張りにして いた. また、当時女性を中心にしてこれまで にない大規模な互助講である「グループ講」 の活動が勃興していた. 積立金でトタン屋根 の「モダンな」家屋を新築する資材を購入す るという趣旨でおおいに盛り上がりをみせて いたこの「グループ講」は、いくつかの村の 女性を中心に2つ組織されていたが、それら はくだんの2人の支持者どうしの連帯グルー プという側面をもっていたことがわかった. じっさいに、かれらの間にどれほどの緊張が あったのかはわからない. 前述のとおり近隣 の誰がどちら派だということは知れ渡っては いるがそれが庭先で話題になるわけではな い. ただ, ある人の行ない——たとえばどの 互助講に属しているか, どちらの茶屋に行く のか、誰と仲がいいのか、など――がその人 がどちら派だという表現になっているのだ. かれらはそうした状況を面白がっていたよう にみえる. かれらにとっては、この状況下で 「どちらの候補者を、なぜ支持するのか?」 よりも、「どちらかにつくこと」が重要だっ たのではないだろうか.

いくらかきな臭い話もないわけではない. ある候補を支持する青年が同じ候補の支持者 の世帯を石鹸や砂糖などの「実弾」を配りな がら訪問する場面に出くわしたことも数度あ る.また、投票日が迫った夕暮れ時に、ある 青年が村の小道に潜伏していた数名から投石 で襲撃されたこともあったし、県庁の町では 対立候補の支持者どうしの抗争からある男



写真 3 県評議員の「選挙宣伝カー」に満載の支 持者たち(県庁の町で)

が「まるでヤギを屠殺するように」殺された。かれらに親しみやすいかたちに書き直された政治劇。そこに書き込まれた人間どうしの葛藤や嫉妬,憎悪,それにもとづく抗争などが,かれらの社会の現実に飛び火しても不思議ではない。選挙の熱狂のこうした側面をどう考えればいいのかは,私にはまだわからない。ただ私が注目したいのは,人びとは現実の地方政治のもとでかれらの日常がどう変わるかより,選挙にまつわる一連の政治劇を,あらたな社会分節の想像の資源として動員し,そのフィクショナルな分節を実際の日常生活のなかにもち込んで可視化し,演ずることをかれら自身が楽しんでいる,という点なのである。

前半で紹介した私のオジの立会演説会で のこと、閉会になった直後、フィールドの 村に住むある青年が私のもとにやってきて, 「お前はどっちにつくんだ」と問うた. 彼自 身はブッシュ候補を支持している. そのと き私は中立を気取って、「どちらでも」と答 え,「そもそもおれには投票権がない」と言 い添えた、場の熱気と緊張とにいささか興奮 気味だったこの青年は、即座に興ざめ顔で吐 き捨てるようにつぶやいた.「なんと役立た ずなお前!」一瞬私はムッとしたが、彼の言 葉は的を射ている. たしかに, ふだんはナコ コの息子やブッシュのオイとして振る舞いお おせているとしても,この状況のなかで,私 はなんの意味もない存在だった. 私は父ナコ コが、自分の支持する国会議員とは反対陣営 に与する実弟ブッシュに投票したのかどうか は知らない. しかし、ブッシュの当選した 晩, 父は黙ってニワトリをつぶし, 一家の夕 食は賑わった、その後の県評議員選挙で、こ んどは父の支持する陣営の候補が当選したの だが、その晩もまた父は黙ってニワトリをつ ぶした。われわれは選挙のおかげで、二度も おいしいスープにありつけることになったの だった.

# ボルネオの豊かな動物世界

加藤裕美\*

森の中を歩きつづけて2時間近くなる.周 囲にはまったくひと気がなく,聞こえてく

るのは風の音、鳥の声だけである。 ぬかるん だ道に足元を取られながら歩きつづけると, 森はいっそう深くなり、ときおり木々の間か ら山々が望見されるようになった。「本当に この先に村があるのだろか?」そんな不安に 駆られながら、人の歩いた跡だけを頼りに、 ひたすらいくつもの小川を越え、山を登り下 りしていった。 すると遠くから人の声や犬の 鳴き声が聞こえてきた. 徐々にそれらの声が 大きくなると、にわかに森が開けて、集落が 姿を現した. 人の気配がまったく感じられな い森の中から突如、集落が現れたときの驚き と安堵は今も忘れられない、私がフィールド ワークをつづけている,マレーシア・サラワ ク州の熱帯雨林の中にある村にはじめていっ たときの思い出である.

サラワク州のあるボルネオは,生物多様性の宝庫であり,約200種の哺乳類,7,900種の植物が生息する熱帯雨林の島である.しか



写真 1 集落への道 木々の間から望見される山々。 集落はここから左手へ 2 km 先にある。

し、1970年代後半から盛んにおこなわれるようになった商業伐採により、森林面積の30%ほどが1985年までに消失した。現在では島内のほぼ全域に伐採道路網がはりめぐらされており、いたるところに伐採キャンプが開設されている。こうした状況の中で、ボルネオの人々と森林資源とのかかわり方は、ここ30年で大きく変化した。

私が調査をおこなっているのは、サラワク州中央部を流れる大河、ラジャン河を河口から船で10時間ほど遡ったところに暮らしているシハン Sihan とよばれる民族言語集団の村である。シハン人は全人口145人のマイノリティーである。もともと主食となるサゴヤシを求めて森の中を遊動していたが、1960年代に政府の政策によって定住し、現在では焼畑耕作をおこなうようになった。私はこの村で人々と森とのかかわり、特に森の動植物の利用を明らかにする目的で、これまでに13ヵ月の住み込み調査をおこなってきた。

村での生活は朝が早い。まだ周囲が暗いうちに、鶏の鳴き声とともに目を覚ますと、まずコーヒーをいれてゆっくり飲み、ロング・ハウスの廊下にでて人々と昨夜おこなわれた狩猟の話などで歓談する。その後、ロング・ハウス内の居室を訪問しあい、噛みタバコを楽しんだり、情報交換をしたりする。そして、日差しが強くなると、女性は籐の採集や焼畑耕作地にでかけていく。他方、男性は猟銃の手入れや魚網の手入れをし、ころあいを

<sup>\*</sup> 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

見はからって狩猟や漁撈にでかけていく. 私は, こうした森の中でおこなわれるさまざまな活動に同行し, 参与観察をおこなってきた.

森で人々が最も生き生きと活動するのは狩猟のときである.シハン人は,五感をフルに活用して動物と対峙する.動物を狩るときの彼らは敏捷で潑剌としている.シハン人に限らず,ほかの狩猟採集民もそうだろうが,彼らの足指は逞しく発達しており,足裏の皮膚は靴底のように分厚い.そのため尖った岩やトゲを踏んでも平気で,森の中を身軽に進んでいける.私はそんな彼らの後をいつも必死で追いかけていく.

マレー語で狩猟することはムンブル memburu(追う, 狩る)と表現される. しかし,シハン語にはそうした動詞はなく,ケアップ keap(歩く)という言葉が使われる. これは,彼らが「狩りにいく」という直接的な表現を嫌うことの現れである. 「狩りにいく」という言葉を聞いて,森の中の動物はどこかに逃げていってしまうと考えている.

彼らがおこなう狩猟の方法には、銃猟、吹き矢猟、槍猟、罠猟、そして鳥黐猟があるが、狩猟は聴覚と嗅覚を鋭敏に働かせながらおこなわれる。サルが木を揺らす音、イノシシが泥をあさる音など、動物がたてるさまざまな音に耳を澄ませ、時には草笛で動物をおびき寄せて動物に接近していく。また、彼らは、「動物の匂い」(abun laut)を敏感に嗅ぎ分け、獲物の種類や方向、大体の距離を察することもできる。どれほど懸命に匂いを嗅いでも、私には悲しいことにまったく何も感

じられない.

獲物となる動物が見つかると、緊張と興奮は最高潮に達する.しかし、物音を立てずに、獲物が近づいてくるのをじっと待つ.そして銃を構え、引き金を引く.耳をつんざく銃声とともに地面に倒れこむ大きなイノシシやマレーグマ.しかし、時として銃弾は命中せず、逃げられてしまうこともある.そんなとき彼らは、まるで疾風のように傷手を負っているはずの獲物を追いかけていき、とどめをさす.こうして捕えられた動物は、樹皮を割いて作った紐で背負って集落まで持ち帰る.

「ごはんだよ!ごはんだよ! (Kaman, kaman!)」食事の支度ができると、それぞれの家から家族全員を呼び集める声がきこえてくる.外で遊んでいる子どもたちは家に戻り、そこらで世間話をしていた老人も帰ってくる.その場に他の家の人がいた場合は、もちろん食事に加わってもいい.しかし、たい

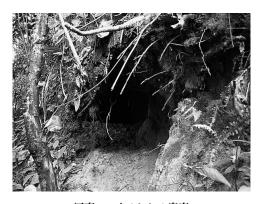


写真 2 イノシシの寝床 洞穴や土のくばみはイノシシの寝床になる. こうしたところでは待ち伏せ猟がおこなわれる.

ていは食器の準備がはじまると、皆そそくさと帰ってゆく. 食事にかかる時間は10分程度であり、短時間のうちに済まされてしまう. しかし、そこで食べられる森の動植物は実に多様だ. 13ヵ月の間に記録した動植物は149種にのぼった.

真夜中、熟睡しているとよく起こされることがある。狩猟にいっていた男たちが真夜中になってようやく獲物を持ち帰ったので、これから食事をするというのである。シハン社会における食事の特徴のひとつは、食事時刻の不規則性である。夜中の何時であれ、男たちが獲物を仕留めて帰ってくると、すぐに調理し、家族全員が起き出してきて食事をするのである。これは動物性の食物(bao)が食事の中で中心的な重要性をもっていることによる。つまり、森から動物性食物がもたらされることによってはじめて、食事がはじまるのである。そのため、飯や植物性の副食を料理し終わっても、食べられずに何時間も放置されることがよくあった。

夕食が終わると、老人たちはよくスケット (suket) とよばれる物語をしてくれる.スケットの中には一晩では語りきれないほどの長大な物語もある.

私はスケットを聞くのが好きだ。多くは動物世界の物語で、人々はタバコをふかし、タバコを噛みながら、老人の話に耳を傾ける。シハン人の集落には電気が来ていないので、夜は空き缶に灯心をたてた簡易ランプが唯一の明かりとなる。人々は、そのゆらめく灯火に照らされた部屋の中で、老人たちの幻想的



写真3仕留めた動物を背負うシハン人 マレーグマのメスを仕留め,集落まで運ぶ青年. 肉は食用として消費される.

な話に耳を傾ける. そして, 老人たちの巧み な語りに, ハラハラ, ドキドキし, ときに大 笑いをするのである.

そんな物語の主人公は人々にとって身近な動物である、イノシシやブタオザル、マメジカ、マレーグマなどである。物語の中で動物は擬人化され、人格をもってさまざまなドラマを展開する。たとえば、オスのマメジカが知恵比べでメスのナキジカに勝って結婚する話、気絶している少女がセイランの鳥の羽ばたきによって目を覚ます話、森の中で道に迷った女性がイノシシの後に付いていき村に帰還する話などである。物語の中の動物は、それぞれに個性をもち、人間を助け、人間に知恵を与えてくれる存在として語られる。

また、シハン社会にはトーテム動物が人間 に力を与え、庇護してくれるという信仰もあ る。トーテム動物と良好な関係をもっていら れると、吹き矢で狩猟をすれば百発百中だ



写真4 ロング・ハウスの廊下に座る老人 ロング・ハウスの廊下ではさまざまな人が歓談を する. 猟銃をもってきて見せる老人.

し、他民族との戦争の際には山刀で切られて も負傷しない. また、超人的な運動能力を獲 得し、高い岩を一気に跳びこすことが出来る ようになるという.

個人のトーテム動物は夢見によって告げられる. そのために、トーテム動物は、おなじ家族でも個々人ごとに異なる. トーテム動物を食べることは厳禁であり、昔の人たちは、たくさんのトーテム動物にかかわる食物禁忌(utam)をもっていたために、好き勝手に動物を食べることはなかったといわれる.

このように、森の中の動物は狩猟の対象であるだけではなく、精神的に人々を支える存在でもある。食事や収入の調査をとおして、動物は食事における蛋白源としても、現金収入源としても、人々の生活を安定させる重要な役割を果たしていることが明らかになった。しかし、それだけでなく、動物は目に見えない精神世界においても彼らの生活を豊かにしてくれているのである。

現在、シハン人の狩猟活動は商業化しはじ



写真 5 森の中で遊ぶ子どもたち 長年森の中で暮らしてきたシハン人の知恵は子ど もたちに受け継がれるのであろうか。

めており、イノシシなどの高く売れる動物だけが狩猟の対象にされる傾向がでてきている。また、学校教育が浸透し、町にある小学校に通うために、現在の子どもたちは、親の世代の者たちよりもはるかに森に入ったり、森に親しむことがなくなりつつある。この子たちが大きくなるころには、シハンを取り巻く環境も大きく変わっていくであろう。そのなかで、長年森の中で暮らしてきたシハン人の知恵は、どのような運命をたどるのだろうか。あるいは、忘れ去られていくのだろうか。今後もシハンの人々と森の動植物の関係をより深く理解できるように、研究を続けていきたいと思っている。

夕方,森の中を歩き疲れて帰ってくる頃,あたりは暗くなりかけている。急いで水浴びと洗濯をすませて村にもどり,真っ暗になる前に灯の用意をする。ロング・ハウスの軒先ではすでに老人たちがランプを灯し、歓談にふけっている。私は、彼らの傍らに座り、話

に耳を向けながら、よく軒先から足を放り出し、目の前に広がる森を眺める.「日本が恋しくなったのかい?」としばしば聞かれるが、そうではない.鳴きしきるさまざまな虫の声と刻々と色を変えていく森の姿は、実に

神秘的で美しい. 私は薄闇の中に悠然と広がる森を眺めながら、シハンの人々の腹を満たす森、人々が空想するユニークな動物が住む森、さまざまな森の姿に思いを馳せているのである.

## 「ゴリラはナイフを持っている」

―カメルーンの森から―

服 部 志 帆\*

中央アフリカのコンゴ盆地一帯に広がる 熱帯雨林(写真 1)には、「ピグミー」と呼 ばれる狩猟採集民が暮らしています。「ピ



写真1 アフリカ熱帯雨林(写真提供:木村大治)コンゴ盆地一帯に広がる熱帯雨林は、総面積が1億7千万haに及びます。この森は、多様な動植物とともに「ピグミー」の生活の舞台となってきました。こんもりとした緑のかたまりの下には、「ピグミー」のキャンプがちらばっており、このキャンプを基点に彼らは狩猟や採集、漁労へと出かけます。

グミー」はゴンゴ (ngongo: Megaphrynium macrostachyum (Benth.) Milne-Redhead. ク ズウコン科) やボボコ (boboko: Ataenidia conferta (Benth.) Milne-Redhead. クズウコン 科) と呼ばれる大きなウチワのような葉でで きたドーム型の住居(写真2)に暮らし、狩 猟や採集,漁労を行なうという生活を送って います. 高台から「ピグミー」の森を眺めて みると, 青い空を背景に深緑色の世界がどこ までも広がっています。また、森の中に一歩 足を踏み入れると、樹高が 40 m ほどにもな る巨木が薄暗い空間を作り出し,太陽の光は わずかに地上に届くくらいです. この森で は、ゾウやゴリラなどの哺乳類や樹間を飛び 交う色とりどりの鳥たち, 大河にゆうゆうと 身をゆだねる爬虫類、目もくらむほどの数で 訪問者を圧倒する昆虫がその生を営んでいま す.「ピグミー」はこのような動物たちを狩

<sup>\*</sup> 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真 2 「ピグミー」の住居

家作りはおもに女性によって行なわれます.数日間かけて少しずつ完成されることが多く,費やされる時間は合計しても4~5時間程度です.立ち上がって動き回ることのできないような小さな住居は多くの機能をもたず、食事と眠る際に利用されるぐらいです.

猟し日々の食料にするほか(写真 3),太鼓や踊りの衣装,そして薬の材料として利用します。また、動物たちは「ピグミー」の民話に頻繁に登場し、森のキャンプを舞台に個性豊かな動物たちが活躍する歌物語が語られます。では、カメルーン東南部に暮らすバカ・ピグミーの森のキャンプで、焚き火を囲みながら狩猟の達人に聞いたゴリラの物語を紹介しましょう。

"ある時、バカ・ピグミーの男たちが森に狩猟へ出かけた.河を渡り、ラフィア椰子(peke: Raphia monbuttorum Drude.ヤシ科の樹木.樹液がヤシ酒になるほか、葉は屋根葺きや歌と踊りの衣装に、葉柄は乾燥台や矢を作るのに利用される)の茂る湿地を越え、森のキャンプに到着した.夜が近づいていたので、あわてて家を作り、焚



写真3 狩猟帰りの男たち

バカ・ピグミーは動物が捕れない日が続くと、「フェネ (pene)」という言葉を使って肉に対する欲求を表し始めます。 フェネが村やキャンプに満ち始めると、これに押されるように男たちは狩猟へ出かけます。 ただし、なかなか出かけないこともあります。

き木を集めた.火をおこし、焚き火の中に プランテンバナナを入れて焼いた.あたり はずいぶん暗くなった.男たちはプランテ ンバナナが焼けるのを待ちながら、それぞ れがこれまでに狩った動物の話に興じてい た.すると、すぐ近くの茂みのほうから、 「ホーッ、ホッ、ホッ、ホー」というおた けびが聞こえてきた.ゴリラの鳴き声だ. キャンプは一瞬にして緊張感が満ち、槍を 持った男たちはわれ先にと暗闇めがけて飛 び出していった.どのくらい経っただろう か.男たちが帰ってきた.ゴリラはどうや ら逃げてしまったようだ.しかし、男たち の興奮はなかなか冷めず、キャンプでは遅 くまで男たちの話し声が絶えなかった.

翌日, 男たちはさらに森の奥にあるキャンプを目指して森の中を歩いていた. 大きなボココ (bokoko: Klainedoxa gabonensis

Pierre ex Engl. イルビンギア科の樹木. 種子が食用になり、火であぶって食すと香ばしい味がする)の木の傍で、一匹の大きなメスゴリラに出くわした. ゴリラは男たちに気づくと、男たちのほうに激しい勢いで向かってきた. 一番前にいた男が、槍をゴリラめがけて投げた. 槍はゴリラにみごとに命中し、ゴリラはどさっと倒れた. 男が近づいてみると、倒れたゴリラはなんと手にナイフを持っていた. さらに驚いたことに、木陰に隠れていたのだろうか、子どものゴリラが現れ、親ゴリラの手からナイフをとって逃げた. 男たちは慌てて子どものゴリラに槍を投げたが、命中せず、子どもは森の中に消えた."

筆者が初めてこのゴリラにまつわる不思議なお話を聞いたのは、今から7年以上も前のことです。カメルーンの森でバカ・ピグミーとともに生活を始めたばかりの頃で、つたない言葉で「ゴリラはどうしてナイフを持っているの?」、「ゴリラはナイフでいったい何をするの?」と聞いてばかりいたことを思い出します。彼らの説明が聞き取れず、ずいぶんもどかしい思いをしました。それから、バカ・ピグミーとともに過ごす時間が増え、彼らの言葉も少しはわかるようになり、ゴリラがバカ・ピグミーにとって重要な動物であることがわかってきました。

ゴリラはバカ・ピグミーの言葉で「エボボ (ebobo)」と呼ばれており、特別にオスには「ギレ (ngile)」、メスには「マンゴンベ (mangombe)」という名前が付けられていま

す (写真 4). ゴリラのオスの体長は 160 cm ほどあり、体重は 150 kg を超えます (メス はオスよりひとまわり小さい). バカ・ピグ ミーの成人の平均身長が 150 cm ほど、平均 体重が 45 kg ほどであることを考えると、彼 らにとってゴリラがいかに大きな動物である かがわかります. ゴリラの狩猟は命をかけた 真剣勝負であり、ゴリラを槍で倒すというこ とはハンターにとって大変名誉なことです. ハンターは倒したゴリラの性別や年齢、体つ きなどの特徴をよく覚えており、狩猟の様子 を細やかに話します。あるハンターはゴリラ の皮で作ったポーチを大切そうに懐から取り 出し、仕留めたゴリラについて語ってくれま した. また, あるハンターはゴリラに膝下を 噛み付かれ, あまりの痛さに数週間泣きわめ いたといいます。このように男性にとっては 命がけの狩猟動物であるゴリラは、女性に とっては森で出会いたくない動物です. とく



写真 4 ゴリラ (写真提供:竹ノ下祐二) アフリカには西ローランドゴリラ,マウンテンゴリラ,東ローランドゴリラが生息します。カメルーンに生息するのは西ローランドゴリラです。写真のゴリラは、ガボンにあるムカラバドゥドゥ国立公園の西ローランドゴリラです。

に子どもを連れているゴリラは凶暴だといわ れます. 女性が森へ採集に出かけたとき, ゴ リラを見つけてしまったら, 気づかれないよ うにこっそりと逃げます. 慌てて村へ帰って きた女性の狼狽ぶりはたいそうなものでし た. このような怖い思いをしないように女性 は「ゴリラのお守り」を作り、不安を鎮め て森へ出かけます. ある女性は, フルアサ ファ (fulu a safa: Adenia tricostata De wilde. トケイソウ科)のツルで編んだお守りを身に つけて森へ行くといいます。さらに、「ゴリ ラの薬」と呼ばれる植物、マナエボボ (ma na ebobo: Lankesteria elegans (P. Beauv.) T. Anderson. キツネノマゴ科)の葉(写真 5) を腰や首につけて森を歩くともいいます. こ のようにすれば、森でゴリラに出会わないだ とか、また男性や女性に劣らず、子どもたち にとってもゴリラは存在感のある動物のよう です. 子どもたちは筆者のところへお気に入



写真5 「ゴリラの薬」になる植物 「ゴリラの薬」になる植物は腰の丈ほどにもならない低木で、オレンジ色の果実をつけます. バカの女性は、森を歩いているときオレンジ色の果実が眼に入ったら、葉を一枚さっとちぎりとり身につけます.

りの動物図鑑を借りに来ては、ゴリラのページを広げおもいおもいにゴリラ談義を繰り広げるのです.

男性によって狩猟されたゴリラの肉は調 理され、バカ・ピグミーの胃袋を満たしま す. しかし、女性の中には「ゴリラは人間に 似ている」と言って、その肉を食べたがらな い人もいます. とくに、ゴリラは人間の中で も,バカ・ピグミーとともに森林地帯に暮ら している農耕民にたとえられます。 バカ・ピ グミーは農耕民に獣肉やハチミツなどの森林 産物や労働力を提供し、その代わりに農耕民 から農作物や工業製品を得ています。一見, 彼らは相互依存的な関係を結んでいるように みえるのですが, 実際, 両者の関係は対等と はいいがたく、体格の大きい農耕民を前にバ カ・ピグミーはなかなか頭が上がりません。 あれこれと命令をする農耕民を見て, バカ・ ピグミーがこっそりと「ゴリラが叫んでいる よ」と陰口を言うことは決して少なくありま せん. そして時には、農耕民の様子をゴリラ に見立てたユニークな寸劇が行なわれること もあります.

また、バカ・ピグミーは「農耕民は死んだらゴリラになる」という俗信をもっており、ゴリラに生まれ変わった農耕民がかつての畑に現れたなどということがまことしやかに語られます。ほかにも、バカ・ピグミーの民話の中には、子どもたちが昼間に村に現れたゴリラを人間と勘違いするという話や、ゴリラがバカ・ピグミーの若い娘を気に入り自分の嫁にしようとする話があります(写真 6)。あまりにも人間に類似した体躯やしぐさのた



写真 6 民話を語る老女

バカ・ピグミーは、民話を豊かな身振り手振りを まじえて語ります。ときに語り手は歌を歌い始め、 聴衆もまた合いの手を入れ語り手に応じます。子 どもたちは大きな目を見開いて、森の動物たちの 登場する民話に聞き入るのです。

めに,ゴリラは農耕民にたとえられ,人間に 間違われ,人間に恋をし,そしてついにはナ イフを持つようになったのでしょうか.

ある日,調査村の近くの農耕民がゴリラを 仕留め、筆者の家まで持ってきました. 農耕 民が籠から取り出したゴリラの手を見て、驚 きました. 人間の手とそっくりなのです. 手 には均整の取れた5本の指があり、手の平に はしっかりとしわが刻まれており、さらには 指紋まであります。 ゴリラがこの手にナイフ を持っていても、 なんらおかしくないような 気さえします. 森でゴリラがナイフを器用 に使って、大好物のジィ (njii: Aframomum spp. ショウガ科)の髄やゴンゴの若芽, ベッ ドの材料になる葉を採集している様子が目 に浮かびました. もしかしたら, スンベム (sumbem: Ficus exasperata (Vahl.) クワ科. バカ・ピグミーがサンドペーパーとして使 う) のざらざらした葉を使って、ナイフを磨 いているかもしれません、農耕民は、ゴリラ の手に見入っている筆者に向かって、「欲しいか?」と尋ねました。筆者がいらないと告げると、ゴリラの手を籠の中に投げ入れ、スタスタと行ってしまいました。農耕民が去るのを見届けると、バカ・ピグミーは「ゴリラがゴリラを殺した」とお腹をかかえんばかりに大笑いしています。彼らの笑い声はなかなかやみませんでした。

2004年10月,カメルーンに隣接するコ ンゴ共和国北部ヌアバレ・ンドキの森で野 生ゴリラが道具を使っている様子が初めて 観察されました (Thomas Breuer 氏をリー ダーとする研究チームは、2005年10月 Public Library of Science Biology 誌において 論文 "First Observation of Tool Use in Wild Gorillas"を発表). 一頭のメスゴリラが沼地 を渡る際、木の枝を使って、かきわけるよう にしながら進んでいたそうです. また, その 翌月には、湿地にいた別のメスゴリラが枯れ た灌木の幹を湿地に突き刺し、片手でそれを 掴んで支えにしながら, 残りの手で食用の水 草を集めている様子が観察されました. さら にそのゴリラは、湿地を渡るために持ってい た幹を倒して橋のようにし、その上を二本足 で歩いていったそうです. かつてゴリラとナ イフの民話を創作したバカ・ピグミーやこの 民話を語り継いできたバカ・ピグミーは、す でにこのようなゴリラの道具使用を森で観察 していたのではないでしょうか. ゴリラとナ イフの民話が生み出された背景には、バカ・ ピグミーによるゴリラの道具観察があったの かもしれません. では、ゴリラが実際にナイ フを使っていた可能性についてはどうでしょ う. これについてはわかりませんが、もしか つてナイフを使うゴリラがいたとしたら、親 からナイフを受け継いだゴリラが現代のアフ リカの森にも暮らしているかもしれません.

#### ゴリラの狩猟について

近年、伐採による生息地の減少や内戦の影響を受けて、ゴリラやチンパンジーの生息数が減少し、保護の必要性が訴えられています. これらの動物は絶滅危惧種として広く認識されており、アフリカの熱帯雨林ではこれらの動物の狩猟が全面的に禁止されています. しかし、筆者は森の住人(バ

カ・ピグミーや農耕民)によるゴリラの狩猟は、彼らがこれまでに培ってきた重要な文化のひとつであると考えています。また、実際にこれらの動物はほとんど捕れませんし、ごくまれにこれらの動物が捕れた場合でさえ、肉は村内で消費されるだけです。彼らのこのような狩猟はサブシスタンスのレベルにとどまっており、外部社会を対象に商業的な目的で行なわれる狩猟とは異なるものであるといえます。現在のところ、森の住人がこれらの動物を捕り尽くすということは考えられません。筆者は、森の住人によるゴリラやチンパンジーの狩猟禁止については、住人の文化と狩猟の持続性という観点から注意深く検討しなおす必要があると考えています。